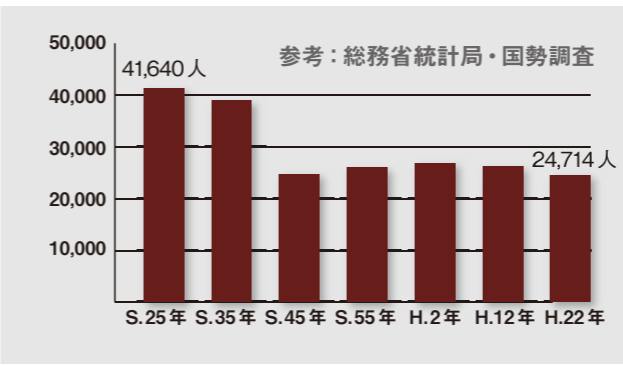


手さぐりの挑戦の一步

かつて日本経済の原動力として石炭を産出し、全国出炭鉱の半数以上を占めていた筑豊地域。全国各地から優秀な人材や一流の物、最先端の文化が集まり、炭鉱の熱気と活気に満ちあふれました。その一翼を担った福智町も同様。人を呼び込む必要もなく、労働人口が押し寄せ、人を迎えるというより、むしろお客様として出向く立場が定着していきます。やがて閉山後は自分たちの生活を守ることが優先され、観光どころではなくなっていました。

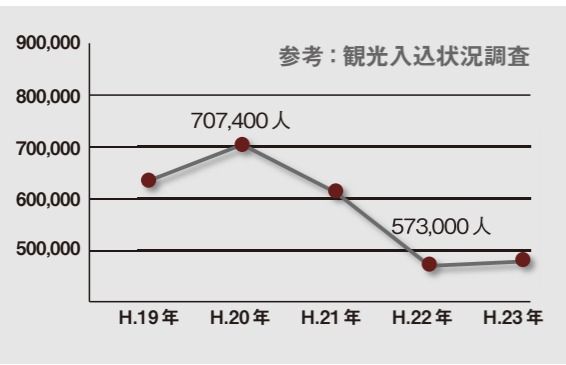
今はまだ観光地とはかけ離れた風土の町で、これから最も求められる意識、それが「おもてなしの心」の醸成です。



↑資料では、旧産炭地の町の人口は昭和25年に最大41,640人となり、炭鉱景気でにぎわいました。その後のエネルギー革命による炭鉱閉山で人口は半減、環境は激変してしまいました。

果てしなく広がる効果

ではなぜいま観光なのか。それは、その効果が幅広く地域課題に関わっているからです。例でいえば「PRのために町の良さを知り魅力を磨く」→「人を招くために町をキレイにする」→「ふるさとに誇りを持つ」→「人々が訪れ交流が生まれる」→「生活と経済が活性化」→「地域ブランド力が高まる」→「定住人口が増加」→「雇用が生まれる」→「税収が増える」→「生活に反映される」というサイクルにつながります。さらに「地産地消の促進」「農商工連携」「地域ブランド創出」「伝統工芸の振興」「文化の伝承」「環境と景観の保全」「生き甲斐づくり」など、その影響は多岐にわたります。



↑福智町への観光入込客の推移。近年は温泉施設の入客数が大きく影響しています。観光地としてはほど遠い数ですが、今後は数をいかに伸ばし、経済効果を高められるかが課題。

とっても楽で、着心地良くて、リラックスできる。だけど人前に出るのは少し気が進まない。今までの町はこんな感じてした...

普段着から



やはり第一印象は、身だしなみから。

相手への礼が伝わり、心地よく接することができる。

これからの町は「見た目」+「意識の転換」が求められます。

お洒落着へ



広域連携でおもてなし

福智町を含む8市町村と福岡県が連携して取り組む「田川まるごと博物館プロジェクト」。期間限定で体験プログラムを盛り込んだ「田川まるごとEXPO」を初めて開催しました。「田川地域にあれば博物館を訪れたように、魅力ある地域資源に触れることができる...。そんなイメージを発信し、都市圏からの集客を図っています。その基盤として、おもてなしの心の醸成は欠かせません」と、担当する中島佳奈美さんは現状を語ります。現在「おもてなし講座」が企画され、本年度中に福智町で開催される予定です。



福岡県 広域地域振興課 中島 佳奈美 さん

まちへの誇りが「おもてなしの心」を育む

炭鉱の時代は、長い歴史から見てわずか百年間の出来事。それ以前は福智修験や上野焼などの文化や技術が交差し、遠方からも人が訪れる場所であったと考えられます。本来は、かなり昔から観光地としての素地があったと言えるのではないのでしょうか。しかし、残念ながら観光地としての意識は醸成されていません。例えば町外の人から地域の魅力を訪ねられたとき「うちの町には何もないから」と多くが答えがち。そんなときに町の良いところを自信を持って伝えることができる。つまり町のいいところを認識して誇りを持つ。そんな意識改革が必要です。その誇りこそが「おもてなしの心」につながり、ホスピタリティを育むのだと思います。



福智町まちづくり委員会 委員長 森山 沾一 福岡県立大学 副学長